

<序文>

このところ、各紙面をにぎわせている見出しを拾い集めてみると、この先、そこに向かって否応なく歩を進めてゆく他ない私達を待ち受ける未来の社会が、少なくともパラダイスでないことだけは確かな様です。「人口減少」「働き方改革」「AI」「在住外国人 249万人」「重高齢社会」「老々介護」「生産性」「効率労働」「マイナンバー登録」「鳥獣被害」「限界集落」等々。

様々な現象や方針、スローガンが、ただ並べられているだけのように見えますが、中には、「これらは皆、根っ子は同じ。地下茎で全て繋がっており、全ての淵源は人口減少に端を発している。その他もろもろの出来事や事象は、人口減少から必然的に派生した途中経過であり結果に過ぎない」と主張する向きもあります。

それはまるで、「差し迫っている事態の重大性＝切迫している危機の大きさ＝を須らく認識すれば、事の是非善悪、政策の理非曲直など二の次、三の次ではないか一些細な事柄に拘って、時局を見失ってはならない」と、言っているようにも聞こえます。

数十年も昔、どこかの国で、戦意高揚のため、全国津々浦々に向けて発せられ、皆が皆、一様に口を噤んでしまったラジオによる喧伝と威圧＝全体主義が大手を揮い、少しでも異を唱える者がいれば「非国民」のレッテルを張り、村八分の憂き目に遭わせ、口封じを行った抑圧の歴史＝とは、全く趣を異にしながら、一切反論の余地を与えない非情さが、ここには滲んでいます。統計数値を巧みに織り交ぜて心理的圧力を加え、気持ちを萎えさせ、相手の牙を抜き去ってしまう物腰の穏やかな、しかし一歩たりとも譲歩する気配を見せない絶対的支配統制が推し進められているのだとすれば、一層不気味ですらあります。激越なアジテーションこそ見られなくとも、日常、何気なく手にする紙誌面を通してソフトタッチに展開され、密かに浸透しつづけるマインドコントローラー。

この巧妙な筋立ての概要は、恐らく次の様なものではないか、と思われま。

「人口減は、まさに国家の危機。そのような国家存亡の秋に、大局観を失って失言をあげつらい、手続き上の不備や些細な記録の改ざんをいつまでも追及するとは何事か。このような局面では呉越同舟、敵味方に捉われず協力体制を整え、知恵を出し合い、一丸となって難局を乗り越えるのが同胞というものではないのか」

これも、どこかで耳にしたことのあるフレーズです。それが当時、どんなおぞましい結果を招いたか私共が皆よく知っている「拳国一致」「大政翼賛」そのものに他ならないのではないかと思われるからです。もしそうなら、現政権が最重要法案として位置付けて来た「働き方改革」は、人口減対策そのものだったという事になる筈です。今号では、その辺りを掘り下げてみたいと思います。